

南海道地震津波の記録

「海が吐き出した日」より

スルメイカ漁と津波

本村 浦岡 勤

役員の翌年二十一歳の時でした。当時スルメイカが大漁で、終戦後の食糧難のこともあり、一般の人もイカ掛けに行っていました。

十二月二十日夜、小舟で内妻の沖へ出て漁をしていました。十二時過ぎに内妻の浜に帰り、舟を決に上げ、夜も遅く寒かったので、中の島の自宅には朝帰りかと思ひ、現在の民宿しらきやの前に住んでいた姉の家で寝ていました。

夜明け前、強烈な地震があり、全員屋外に出たが揺れが大きく、立っていることができず、地面が割れるのではないかと思ひ、畑の棚にしがみつきました。

どうにか揺れが終わるのを待ちました。寒い夜で、地震に未経験だったので、津波のことなど念頭になく、遅れと服を着たまま床に就いた夜は静かでした。

私の耳に何か「ザー」という、水に吹き付ける風のような気配がしたので、はじめ外に出た時は、風が無かったのに、これは変だなあと思ひ、急いで外に出た。なにげなく西の春日神社の方を見た。現在の内妻川を流れている新国道の辺りが、真白にふくれ上がっているのです。これは津波だと思ひ、大声で「津波だ逃げろー」とみんなを起し、取るものも取らず、子供を連

れて国道の方へ避難した。後で分かったのですが「ザー」という音は、波が浜の砂利を押し上げる音だったのです。幸いにみんな助かりましたが、姉の家は跡形もなく危機一髪でした。

中の島の自宅も心配でしたが、道中が暗く、旧国道は遠くで道がどうなっているか分からず、夜明けまで待ち、衆が白みかけたころ、中の島へ向かった。

八坂橋までくると、ゴミで一杯、これでは家があるのかなあと一層心配になりました。どうにか小学校の前まで来たが、半同食堂の横の小橋の上に大きな船が横たわっていて通行止、しかたなく小学校の校庭に廻って、川向こうに立っている我が家を見て一安心。その後、家の者とも連絡がつき帰ってみると、家の中は足の踏み場も無く、一時はうろたえました。母の話だと津波のことは頭にあつたので、荷車を仕立てて、荷物を少し積んで早めに逃げたので、潮にもあわずに無地中村の知人宅に着いたそうです。

地震・津波は、海岸に住む我々には切っても切れないことで、このたびの体験を聞いたことから、次のことを念頭に置くことが必要だと思ひます。

一、一刻でも早く逃げる。

二、地震の後は、玄関の戸を締めずに逃げるまで開けておく。

三、どうしても道がふさがった時には、無理をせず、二階のある家は、二階に逃げる。逃げる途中で死亡事故にあつた人が多い。

四、避難するコースは、避難所に向かって一番広い道路を。近道でも狭い道は家屋の倒壊等を頭置く。

以上が私の南海道地震にあつた時の体験です。なお当時は食料難で、売れていたサツマイモを焚火で焼いて食べていた時、玄米のおにぎりをどなたかにいただき、その嬉しさは味は、今も忘れられません。今も分からないその方に厚く御礼申し上げます。